



千種の思い出

元分校長、元教頭 梅谷博貞
(前県立温泉高校長)

修学旅行で九州に行ったときの事です。ホテルの看板に「千種分校様」と書いてあるのを見て、生徒たちは「こんなのイヤだ」と叫んでいました。

たとえ分校であっても、生徒に誇るべきものを持たせねばならないと私は思ったのでした。

ちょうどその頃、当時の一谷教育長が、県内でいちばんきれいな千種川沿いに青少年のためのキャンプ場を計画され、三室山のふもとにキャンプの拠点を考えておられました。さいわい私は長年自然科学の「地学」を教えてきており、山野を歩くことにも馴れていましたので、分校の生徒に気象や天文、岩石にくわしいキャンプリーダーを育て、特に率先してよく動くリーダーの養成を目指したのでした。

キャンプ場が整備され、小中学校の生徒がやって来るようになると、キャンプリーダーはよく子供たちの世話をして「キャンプ場の兄ちゃん、姉ちゃん」と親しまれ、又、美方郡の兎和野高原野外教育センターなどにも出かけ、千種の名をあげてくれたものでしたが、それにもまして私が一番うれしかったのは、生徒たちがキャンプについてはどの高校にも負けないという自信を持ち、人間としてのプライドを持ってくれたことでした。

昭和47年12月12日、夜中の1時半のことです。

まわりが騒がしくなったので目を覚まし、町営住宅のガラス戸をあけて見ると私たちの校舎が、ぐれんの炎をあげて燃えているではありませんか。

住宅や近くに住んでいる教職員がかけつけましたがもう手がつけられない状況でした。12日焼跡の整理や片付けなど。

13日は大雪でしたが生徒も職員も文字通り真っ黒になって働きました。

14日からは焼け残った理科館棟での授業と放課後に焼跡の片づけ。

プレハブの仮校舎がすぐ建設されましたが夏は暑く、冬は寒い教室でした。

卒業生の有志は、県教委へ次々に陳情文を送ってくれました。

そして新しい立派な校舎が出来上がりました。

この校舎を見て地元から独立校にしようではないかという声があき上り、町長さんを始め育友会、同窓会、県会議員の方々がたびたび県庁を訪ねて独立校運動を重ねられ、ついに昭和50年4月から県立千種高校として独立し、初代校長吉田太郎先生をお迎えすることになったのでした。

私は千種町に8年間お世話になりました。

今でも出かけますと、町内のどこを訪ねてもなつかしい思い出がよみがえってきます。私にとって千種は第2のふるさとなってしまっているのです。